

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第八回

第八章 銅山へ

1

明治二十七年（一八九四年）一月、貞剛は、鰻谷の住友本店で友純と会っていた。

友純は明治二十五年（一八九二年）四月に故・友忠の娘、満壽と結婚し、住友家に入った。翌明治二十六年四月には住友家を相続し、吉左衛門友純となっていたのである。

本店では、友純を交えて盛大に新年の祝賀会が開催されていた。会の喧騒を離れて、友純は貞剛を別室に招き入れていた。

「別子べっしに行っていただけなのですわね」

友純は、端正な顔に陰りを映していた。

「そのように決意いたしました。本店支配人としての仕事は引き継ぎましたのでご安心ください」

貞剛は、友純を真つすぐ見つめた。

友純に対して貞剛は特別な思い入れがあった。自分が探し出してきて、住友入りを懇請した経緯がある。

「ご苦勞をおかけいたします」

友純は貞剛いたを労わる。

「お言葉、かたじけなく存じます」

貞剛は頭を下げた。

友純は、貞剛が想像していた以上に人格識見ともに優れ、人としての温かさ、思いやりの深さがあった。そして何よりも生まれ持った威厳というものが、体の奥底から発せられていた。

そのためだろうか、住友に入ってわずか三年目だが、お世辞ではなく、重役のみならず社員たちの尊敬を集めつつあった。

貞剛は悩んでいた。

現在、同時多発的に起きている大島としま供清の反乱、重役会のまとまりのなさ、別子銅山の坑夫や職員の不満やサボタージュ、そして煙害による地域農民による騒擾そうじょうなどは、全てさいへい幸平に問題の源がある。

幸平の独裁に、誰もが倦^うみ始めているのだ。

幸平は、住友の中興の祖である。それには異論がない。

明治政府に接収されそうになった別子銅山を守り抜いたばかりか、経営の近代化に大胆に踏み切り、住友の今日の隆盛をもたらした。

「別子の申し子」という言葉が、最もふさわしい人物であることは間違いない。

比類なき成果を上げたことで、幸平は、カリスマとなった。絶対権力者である。

家法も改め、家長友純といえども経営には口が出せなくなったのである。

批判する者がいなくなった場合、自分で自分を律しなくてはいけない。幸平もそのことを十分に分かっているはずだ。

しかし周囲に諫言^{かんげん}する者がいなければ、人間誰しも傲慢^{ごうまん}になっていくのを止めることはできない。

貞剛は、自分はどうなのか？ 十分に幸平を支えることができたのか？ 自問自答しても、満足できる答えは出ない。

今回、別子銅山に行くことで何が解決できるか分からないが、幸平の名誉だけは守りたい。それが本音だ。

しかしそのようなことを考えながら、このもつれにもつれた多くの問題を解決できるのだろうか。

あるいは名誉を守ろうとすればするほど、問題解決が遠のく可能性もある……。

友純の「苦勞をかける」という言葉には、貞剛が宰平と問題解決との板挟みになっていることへの同情が滲み出ている。

「友純様、私が別子銅山に行ったとしても何ほどのことができるか分かりません」

「私は、貞剛殿の『火中の栗を拾う』姿勢に感服しております」

「煙害の解決には大変難しい問題があると思います。また別子銅山の社員たちの心もずさんでいるやに聞いております。私は、問題解決に失敗した挙句、住友を潰してしまうかもしれません」

友純が微笑を浮かべた。貞剛はそれを見て、小首を傾げた。

「私に住友入りを勧められた際、何をおっしゃったかお忘れですか？」

貞剛は手を打って、大きく頷いた。

友純に、「住友の財産といったところで何ほどのものでもなく、たかが銅を吹いて儲けたくらいのもので、潰してもらっても結構です」と言ったことを思い出したのだ。

「これは友純様に一本、取られましたな」

「思い通りにおやりください。家長は経営に口が出せないことになっていますが、責任は取らせていただきます。貞剛殿が住友を潰す

ことになるなら、それは貞剛殿ではなく、私が潰したことになるでしょう。私が、住友を相続いたしました際、叔父の西園寺公さいおんじからはなむけに『初めあらざるなし、よく終わりあるはすくなし』との言葉を頂きました。この言葉は、私への諫いさめではありますが、住友を今日の繁栄に導いた宰平殿にも当てはまるかと思えます。どうか、宰平殿の名誉も守るよう努めていただければ嬉しく思います」

友純は小さく頭を下げた。

西園寺公望きんもちが友純に贈った言葉の意味は、「人は皆、物事を始めることはできるが、終わりを全うする者はすくない」という意味だ。

友純が最後まで住友のために活躍するようにとの西園寺の願いがこもった言葉だが、それを援用して友純は、宰平に晩節を汚してはしくないと考えているのだろう。

友純も今回の問題の核心は、宰平の独裁に対する重役や社員たちの不満と見抜いていたのだ。

「大島は、今月、理事を辞めさせられました。が、まだまだ宰平総理人へ批判の矛先ほこせんを向けております。事態は、容易ならざる方向に進むやもしれません。友純様の御心を悩ませるかもしれません」

「覚悟しております。私は、私のできることをやらせていただきます。それよりも心配なのは、別子銅山の煙害です。新居浜にいしほまなど周辺の人々の協力があつてこそその別子銅山だと思つています。西園寺公

によりますと、日本は韓国を巡る清国しんとの対立が、いよいよ抜き差しならぬ状況になってきておるようです。そうなりますと銅の需要も大きくなるでしょう。住友への国家の期待も膨らむはずです。しかし国家の期待に応えるためとはいえ、地域の人々にご迷惑をかけるようでは、住友は早晚、潰れます。そうではありませんか」

「唐の太宗の『貞觀政要』にも『君たるの道は、必ず須すべらくまず百姓ひやくを存すべし』とあります」

「上に立つものは、人々を憐あわれみ、恩恵を施さねばならない。人々を疲弊ひへいさせるようでは自分の足を食くべるようなものだ、という君主の道を説いた言葉ですね。心得なくてはならないことです。住友が、こうして四百年近くも続いているのは、百姓を存すべしの姿勢を守ってきたからでしょう」

貞剛は、友純の言葉に感激した。

今更ながら住友は運がいい。こんなにも聡明な人物を家長いただに戴いたくことができたのだから、と。

「足尾銅山の件はご存知でしょうか」

貞剛は聞いた。

「はい。私たちは、他山の石とするべきでしょう」

友純は真剣な表情となった。

「足尾銅山の鉍毒被害を追及されている田中正造氏しやうぞうとは、第一回衆

議院議員選挙でお互い当選し、議会でお話をいたしました。信念のある人物であるとお見受けいたしました」

「そうでしたか。ご縁があるのですね」

友純の言葉に貞剛は軽く頷く。

「正造氏が、国会で鉱毒問題を取り上げましたので、今や世間もこの問題に大きく関心を寄せております。事態を悪化させれば、古河ふるかわと同様に、住友も厳しい指弾を受けることになります」

田中正造は、明治二十四年（一八九一年）十二月十八日、第二回帝国議会で足尾銅山鉱毒問題を初めて提議した。

田中は、足尾銅山から流れる鉱毒が渡良瀬川流域の村々に甚大な被害を与えており、「去る明治二十一年より現今にわたり毒気はいよいよその度を加え、田畑は勿論もちろん、堤防竹樹に至るまでその害を被ったと訴え、政府がこれに対して何もしないのは、憲法違反であり、採掘許可を取り消せと厳しく政府の姿勢を質ただした。

そして翌明治二十五年（一八九二年）五月二十四日にも、「毒気は年を追っていよいよその度を加え」と訴えた。田畑は不毛になり、川の魚は死滅し、渡良瀬川流域の村民の健康も害している。これらは足尾銅山の鉱毒が原因であることが明白であるにもかかわらず、農商務大臣は、原因が確定しないなどと逃げの答弁を繰り返すのみだ。早期に問題解決に当たらなければ、渡良瀬川が氾濫はんらんし、川底に

沈殿した鉱毒が周囲の田畑に溢れ、被害が拡大する。速やかに採掘許可を取り消し、被害の賠償を進めるべきだと政府の対策の遅れを批判した。

二年前の明治二十三年（一八九〇年）八月二十三日、渡良瀬川は大洪水となり、鉱毒被害が流域全体に広がった。

田中は、早期に対策をしなければ、再び大洪水が発生した場合、その被害は計り知れないと不安視していた。

不安は明治二十七年（一八九四年）七月に的中する。鉱毒被害が一層拡大し、田中の足尾銅山操業停止請願運動はいよいよ激しさを増していくことになる。

「世間の非難を受けるから、問題に対処するのではなく、この先もずっと住友が栄え、国家の任に堪えるためには、別子銅山周辺の人々を安んずることが絶対に必要です」友純は強く言い、「貞剛殿、よろしく願います」と深く頭を下げた。

「問題を解決できなければ、私の命は友純様に捧げます。たとえ住友を破壊する結果となったとしても、人々が安寧あんねいを得られるようにいたします。それが住友の名誉を守ることだと考えます」

貞剛は、強く言い切り、唇を固く引き締めた。

貞剛を乗せた住友所有の蒸気船木津川丸きづがわまる みよしまが御代島沿岸の新居浜港に着いた。

明治二十七年七月十一日、空は青く澄み渡り、目の前に迫る四国山脈の緑が鮮やかだ。大阪と違って、空気が美味うまい。肺の隅々にまで酸素が沁み込んでいく気がする。舩はしけに乗り移り、新居浜に向かう。供はいない。貞剛一人である。

*

貞剛は、別子銅山で死ぬことを覚悟していた。自分の命を友純に捧げると言ったのは、決して追従ついででもなんでもない。本気だった。しかしそれは悲壮感を伴ったものではない。きわめて自然体であった。

考えてみれば、四天流してんりゅうという居合めんきよかいでんの免許皆伝となつて以来、相手を斬るか、自分が斬られるか。はたまた自分を斬らせて、相手を斬るか。という覚悟を持って生きてきた。

京都御所をお守りした時も、司法官として函館はこだてに赴任した時も、そうだった。死を覚悟するというぎりぎりの淵に身を置くと、周囲

の景色が鮮やかに見えるようになる。心に余裕ができるのだろうか。人々の動き、それは物理的のみならず、心理的な動きまでもはつきりと見えるようになる。

今回も死を覚悟したのは、誰も引き受け手のない別子銅山の危機である、人心の乱れと煙害という問題を解決しなければならぬからだ。

この二つの問題は、短期的に成果を上げようと強引に攻めていけば、問題が複雑になるだけだろう。

また逆に住友を守ろうとすればするほど、結果として住友を破壊することになる可能性がある。

攻めてもダメ、守ってもダメ。道はない。しかしきっと道は見つかる。または自分の前に道が切り拓かれるだろう。そのためには死を覚悟する、すなわちすべての欲を捨てることではないか。

出発にあたって妻の梅子に、「問題が解決できるかどうかは分からない。いずれにしてもいつ帰ってくるか、はたまた帰ってこないかもしれない。子どもたちを頼んだぞ」と言った。

梅子は、泣きもしない。表情も淡々としたものだ。妻ながらたいした女だと思う。しっかりおやりください。子どもたちのことはお任せくださいと落ち着いた口調で答えた。

「母のことも頼んだぞ」

母田鶴は、貞剛が、また苦勞の道を選択したことを嘆いている。目には涙さえ滲ませているではないか。

さすがの貞剛も心が揺れた。西川吉輔に誘われて戊辰戦争に馳せ参じる際、村の境まで送ってきた田鶴の姿をまざまざと思い出した。

ようやく落ち着いた暮らしになったと思いきや、また貞剛が命を危険に晒すかもしれないと思うと、それだけで心が弱くなってしまうているのだ。

「お母様のことは、ご心配なさらぬように」梅子は、貞剛を睨むように見つめると、田鶴に向かって、「お母様、貞剛ひとりぐらい死んだって何ですか。私がいるではありませんか」と決然とした口調で言った。

貞剛は、その言葉に驚きを覚えたが、梅子の目に、涙だと思われる光るものを見つけた。思わず、申し訳ないと頭を下げた。

ある日、貞剛の別子銅山行きを聞きつけた臨済宗天龍寺派総本山である天龍寺の僧侶・峩山が訪ねてきた。

峩山との交流は古い。いつの間にか、最も心を通わす仲になっていた。

もともとの交流の初めは、伊庭の知人の息子が出家し、天龍寺塔頭の住職をしていた縁だったと思うが、もはやそんなことは忘れてしまった。

貞剛は、鰻谷の住友邸の裏手に居を構えていたが、今は近くの塩しお町に越まっていた。峩山は、鰻谷の頃から頻繁に訪ねて来ていた。

峩山には、貞剛を訪ねる理由があった。それは天龍寺の再建だった。蛤はまぐりごもん御門の変で長州の本陣となっていた天龍寺は、薩摩の兵の攻撃で焼失してしまったのだ。それを再建するために幸平や貞剛など住友財閥の幹部に接近したのだが、今ではそんな資金援助のことは一切、口の端はにも上らない。

ただ酒を飲み、ごろりと横になるだけだ。一方の貞剛は、下戸げこ。全く酒を飲めない。しかし酒飲みの相手は得意だ。羊羹ようかんなどの甘い菓子を摘まみながら、茶を飲んでいる。

「貞剛殿、この屋敷は相変わらずぼろじやのう。庭の草木は伸び放題。家は雨漏り。ほらそこから星が見えるわい」

縁側に座る峩山が顔を上に向ける。その視線の先の、軒先は崩れ落ち、夜空が覗いている。星が見えると、峩山は言ったが、曇っているのに星は見えない。しかし峩山の目は、雲を払い、星の輝きを受け止めているのかもしれない。それくらいはできる僧侶だ。

言われる通り庭も家も荒れている。庭については、貞剛はあまりこまごまと手を加えるのを好まないからだ。家の方は、仕事の忙しさを理由に修繕を放置していた。

「雨露は凌しのげますし、多少傷んでいる方が、泥棒にも入られず、安

全なのです」

峩山の隣に座り、庭を眺めていた貞剛は笑う。

「仕方がないのう。まあ、味があると言えば、あるのだが……」

峩山は、手酌で湯呑に酒を注ぐ。

峩山の酒は、杯でちびちびではなく、湯呑でぐいぐいと飲む。禅

門屈指の酒豪だ。

いつも白磁の徳利を持参し、それに貞剛の家で、酒を補充して寺へ帰る。

「素晴らしい天子様の世になりましたから、泥棒も少なくなり、本当のところは戸締りも不要です」

「そうはいうものの、いっぞや泊めていただいた時、朝になり、雨戸を開けようとしたら全く開けられず、そのまま雨戸ごと庭に倒れてしまったぞ。ははは」

「そんなこともありました。あの時の大きな音は、今でもよく覚えていません。良き目覚ましとなりました」

「あの時、まだまだ修行が足りんと反省したものだ。わしの人間が完成する時は、あの戸をすっと開け閉めできるようになるだろう」

真面目な顔で言う。

「では、自分、直さずにそのままにしておきましょう。和尚おしょうの修行のためにも」

貞剛は笑った。

「ところで別子銅山に行くそうじゃな」

峯山が、酒の入った湯呑を縁側に置いた。

「はい。参ります。もうすぐ出発です。私がいなくとも、遠慮せずここを訪ねてください。母や梅子や子どもたちが喜びます。私も安心ですから」

「承知した。番犬代わりにはなるだろう」

「峯山和尚を番犬に使えるとは、私は果報者ですね」

貞剛の言葉に、お互い声に出して笑う。

「なにはともあれ心配せずに行きなされ。骨はわしが拾うてあげるから」

峯山は貞剛を見つめて言った。

「かたじけなく思います。ぜひ、お願いします。しかし、今回はお止めにならないのですね。国会議員になった際は、『止めなさい』とおっしゃったのに」

貞剛は疑問を口にした。

「国会議員は誰でもやれるが、別子銅山の問題を解決できるのは、貞剛殿しかいないからなあ」

峯山は、酒を一口飲んだ。

貞剛は、峯山の言葉に胸を締め付けられるほど感動した。

別子銅山の問題を解決できるのは、自分しかないのだ。もし人生にあらかじめ決められた運命の流れがあるなら、別子銅山問題の解決に向かうのは必然だったのだろう。峩山の言葉を貞剛は重く受け止めた。

「山で読む本を何かいただけませんか。ご紹介でも結構です。買って持っていくます」

貞剛は頼んだ。

「本など読む必要はない。しかしどうしても言うなら、これを読みなさい。はなむけに差し上げよう」

峩山が差し出した一冊の本を見ると、それは『臨濟録』だった。

唐末の禅僧臨濟・義玄ぎげんの語録である。

「禅には、いささか関心がありますから、これを拾い読みしたことはありますが、なかなか難しい……」

「禅は書物で理解するものではない。だから読む必要はないが、それでも退屈しのぎにはなるだろう」

しかし、言葉とは裏腹に、書物にはところどころにしおっ葉が挟んであった。何かの際にはその箇所を読むようにとの峩山の心遣いを、貞剛は嬉しく思ったのである。

「そう言えば、貞剛殿とは禅の話はしたことがなかったなあ」

感慨深げに言う。

「いつも飲んでおられるだけですから」

貞剛は微笑する。

「禅とは、こうやってお互いが会うということかもしれない。二人が瞬間、瞬間、感応する。わしが酒を飲む。よもやま話をする。ごろりと横になる。それを直感で、ここで」峩山は、胸と臍の間あたりの方三寸ほうさんずんと言われる箇所を指さした。「なにかを感じる、理解するのではなく、心眼で見ることかろう」

「酔った和尚を介抱するのが禅とは、上手い言い訳を考えましたね。今、心眼で酒が切れたことが分かりました」貞剛は、部屋の奥に向かって、「梅子、酒を頼む。たっぷりな」と声をかけた。

梅子が明るい声で「ただちに」と返事をした。

峩山は、はははと声に出して笑う。

「この絶妙の感応が禅である」

貞剛も声に出して笑った。

「臨済は、『信不及』と言った」

峩山は、庭の草が風に揺れるのを、さも愛おしそうに眺めながら湯呑を傾ける。

貞剛も同じように庭を眺める。

「己おのれを信じ切ることだ。外に何かを求めるのではない。己の中にすべてがある。己を信じ切って事を進めればよい」

峯山は酒を飲み、ごくりと喉のどを鳴らした。

*

陸に上がると、貞剛と交代することになっている銅山支配人の久保盛明と数人の部下が待ち構えていた。

「お疲れ様でございました。お待ちしておりました」

久保が挨拶をする。暗く、冴えない顔だ。管理不十分の責任を取らされて貞剛と交代させられる結果になったことに、複雑な思いを抱いているのだろう。

久保だけではない。他の社員たちも一様に表情が固い。

——峯山に骨を拾ってもらうことになるかもしれない。何はともあれ信不及だ。自分を信じ切ることだ。

貞剛は、彼らの沈んだ表情を見て、覚悟を新たにしました。

3

貞剛は、自分のために用意された惣開そうかいの新居浜分店近くの住居に荷物を置いた。荷物と言ってもたいしたものはない。多少の着替えだけだ。後は峯山から贈られた『臨濟録』だけ。もつともこれが荷

物と言えるかどうか。

荷物のあまりの少なさに久保が驚いた。彼の部下の一人が、大阪にすぐに帰るつもりだから荷物が少ないのだと囁く声ささやが聞こえる。ちらりと貞剛が睨むと、慌てて口をつぐんだ。

多くの荷物など必要はない。ここで死ぬ気で来ているのだ。生活に必要なものは、ここで調達すればよいではないか。もともとたいして贅沢ぜいたくをする方ではない。貞剛は、目で、陰口を囁く部下に言い聞かせたのである。

住居は、坪数こそは百二十、三十坪はあるが、主家おもやには二畳の玄関、六畳の台所、三畳の女中部屋、八畳の客室があり、それに付随して中二階の二畳の間、そして四畳半の離れ座敷となっていた。決して広くはない。妻の梅子や子どもたちが押しかけたらどこに寝泊まりさせるか困ることになるだろう。

「狭くて申し訳ありません」

久保が眉を顰ひそめる。

「いえ、十分です。庭もありますから」

離れ座敷に行く廊下に沿って庭がある。植栽はまばらで、その隙間を縫うように夏の陽光を浴びて成長した名も知らぬ雑草が丈を伸ばしていた。

「庭の手入れをさせますから」

久保が恐縮している。

「いえ、このままで結構です。なかなか姿がいいではありませんか」

貞剛は、庭を型にはめて手入れするのを好まなかった。

「私は、この四畳半で起居いたします」貞剛は、離れ座敷をぐるりと見渡し、「ところで山にひと部屋、借りられますかな」と聞いた。

「はあ」久保が首を傾げた。部屋を借りたいとはどういうことか、久保には貞剛の意図が計りかねたのだ。

「いえ、せっかく別子に來たのですから、里である新居浜よりも頻りに山で起居しようと思ひましてね。接待館の中でも、その近くでもいいので、ひと部屋お貸しください」

穏やかに微笑む貞剛に、久保は驚きを隠せない。久保は銅山の支配人であったが、新居浜で執務を取っていたからである。あの険しい道を登り、山で暮らそうという発想はなかった。

「山で暮らされるのですか？」

久保は聞いた。

「はい。明日にでも登ってみます」

貞剛は答えた。

久保は神妙な表情で「すぐに用意させます」と答えた。

そこに「失礼します」と少女が入ってきた。紺緋こんがすりの粗末ながらも清潔な着物を着て、臙脂えんじの帯を締めている。

「お光坊、お入り」

久保が言った。

貞剛は頭を下げた。

「この子が貞剛殿の身の回りの世話や食事を作ってくれます。通いになります。十五歳なのになかなかよく気働きのできる娘です。」「

まだあどけなさを残しているが、一見して、利発な印象である。

貞剛は、自分の子どもと同じくらいの年齢の少女に親しみを覚えつつも、申し訳なく思った。

「お光さんか。貞剛と言います。よろしく頼みましたよ」

「はい」

お光は頬を赤く染めて恥ずかしそうに頷いた。

「今夜は、新居浜分店の広間で歓迎会を開きますので、ご出席願います」

久保が言った。

とても歓迎している顔ではない。最初に挨拶を交わしてから一度も笑顔がない。よほど嫌われたのだろうか、却かえっておかしみを覚えた。

歓迎会の時間になると、貞剛は住居から、指定された新居浜分店の広間に向かった。外は、暗闇というほどではない。陽が陰り始め

ている。

広間には、すでに久保以下幹部や職員がずらりと居並んでいた。たくさんの燭台しよくたいに火がともされ、中は昼間のように明るい。しかし、集まった職員たちの表情は一樣に暗い。燭台の明かりの陰になっていからではないだろう。心が塞ふさいでいるから、表情が暗いのではないだろうか。誰も貞剛と目を合わせようとしない。そればかりか、露骨に無視を決め込んで、隣の者と雑談を交わしている者とさえいる。

——虫がいる。虫が巣くっている。

貞剛は、居並ぶ幹部、職員の顔を見て、ふいに「虫」という言葉が浮かんだ。

彼らの心の中を虫が散々食い散らかしているため、上の者と下の者との間に円滑な話し合いがないのだろう。

いわゆる意思疎通が悪く、不満が溜まりに溜まっているに違いない。

沢庵たくあん禪師が「上中下三字の説」を唱えたことがある。

ある城主から、政治について質問された時の答えだ。

「上」という字を逆さにすれば「下」になる。上とは城主、下とは城下の民衆だ。上と下との間に「中」がある。「中」という字は「口」を一本の縦棒が貫いている。この縦棒は「言葉」を表している。すなわち「口」から発せられる言葉、縦棒が「上」と「下」とを結び

つけるのだ。

上の者は下の者と、下の者は上の者と、よく言葉を交わさねば、政治はできないという意味だ。上意下達じよういかたつ、下意上達かいじようたつには最も重要で、それがなければ人心は倦み、空気が淀みよせ、良い気が流れず、政治は停滞する。

——住友も同じだ。なんとか良い流れを作りたいものだが……。宴うたげが始まり、幹部、職員たちは料理を食べ、酒を飲んでい

久保も隣に座る幹部と話をしているが、さほど楽しんでいるようには見えない。貞剛のところには歩みよって酒を注ごうという者も皆無だ。貞剛が酒を飲めないことが知られていたとしても、一人も挨拶にこないのは異常だと言える。

貞剛は、幹部や職員たちの考えにおよそ推察がついていた。彼らは、貞剛が宰平おひの甥であるため、宰平の意向を受けて、幹部や職員しゆくせいの肅清にきたのだと思っ

ているに違いない。大島供清は、本年の一月に理事を解任されたが、彼に扇動されて銅山の職場の秩序を乱した者が、この場に何人もいる。それらの者たちは解雇されるのではないかと不安なのだ。クビを切りにきた貞剛に、尻尾しつぽを振り、作り笑顔を浮かべて近づくわけにはいかない。そんな思いなのではないだろうか。

「おう、支配人様」

突然、屈強な男が、貞剛の前に胡坐あぐらをかいた。事務方の職員というより、坑夫という印象だ。一升瓶を抱えている。

——誰も挨拶にも来ないと思っていたら、赤ら顔の熊のような男が来たわい。

貞剛は、なんでしょうかと、言う風ふうに小首を傾げた。

「俺の酒を飲んでください」

一升瓶を貞剛の湯呑に傾けようとする。

「申し訳ないが、私は不調法なのだよ」

貞剛はにこやかに言う。

「なんだ。山に来て、酒も飲めねえのか。たいした奴じゃないな」
男は大声で笑い、「なあ、支配人様、山の歓迎は、ちと荒いぜよ。いっこの燭台が飛んで来るか分からんから、せいぜい気をつけることだなあ」と燭台の脚を掴んで揺すった。皿の上で燃えている火が大きく揺れた。

周囲の話し声がびたりと止んだ。貞剛が男を怒鳴どなるか、男が酔った勢いで貞剛に殴りかかるか、いずれにしてもひと悶着もんちやくありそうな空気に皆が固唾かたずを呑んでいる。

「ほほう、この燭台が飛んでくるのかね」

貞剛は、笑みを浮かべて、自分も男が掴んでいる燭台の脚を掴み、揺すった。

男は、貞剛が全くたじろぐ様子を見せないので拍子抜けしたように力を抜き、燭台を掴んでいた手を放した。

同時に、どちらかと言えば小柄な貞剛が、ひどく大きく見えたのだろうか、男の表情にわずかに脅えが浮かんだ。

男は立ちあがると、「そういうことだ。気をつけろや」と一升瓶を抱えて、自席に戻った。

「ご忠告、痛み入ります。よろしく指導してください」

貞剛は、静かに低頭した。

男は無言で、すっかり勢いをそがれたようにおとなしく酒を飲み始めた。急に空気が緩み、何事もなかったかのように幹部や職員たちが言葉を交わしだす。

貞剛は、湯呑を持ち上げると、すっかり冷めきった茶を口にした。

住居へ帰ると、「お帰りなさいませ」とお光が待っていた。

「お光さん、まだいたのかね。早く帰りなさい」

「大丈夫です。家は近いですから。お風呂を沸かしてあります。それからお布団も敷いてありますので」

「ありがとうございます。この近くに住んでいるのか」

「はい。おばあちゃんと一緒に暮らしております」

「お父さんやお母さんは？」

「お山で暮らしています。おばあちゃんは長い間、仲持なかもちをしています。私たちは、別子のお山のお陰で暮らさせていただいております。どうかいつまでもお山が栄えますようにお願いいたします」

お光は、深く頭を下げた。このことを伝えたいために残っていたかのようだ。

「分かりました。ますます栄えるように努力します」貞剛は微笑し、「ところで」と、お光に訊ねる。「明日、早朝から山に登りたいのだが、誰か案内してくれる者を知らないか」

「支配人様なら会社の人が案内してくださるのではないですか」

お光が不思議そうに聞いた。

「そうかもしれないが、あまり好まないんだ。誰か知らないか」

貞剛の問いかけにお光は少し考えていたが、何かを思いついたのか表情を輝かせた。

「弟こきちの小吉に案内させましょう。山で仕事をしていますし、丁度、うちに来ていますから」

「そうか、それはなによりだ。ぜひ頼みたい。明日、早朝に迎えに来てくれ。早くても一向にかまわんから」

「はい、明日、陽が昇る頃、小吉を迎えに寄こします」

お光は、笑みを浮かべると、着物の裾を翻ひるがえして、小走りに帰って行った。

「おはようございます」

貞剛が、寝巻のまま顔を洗っていると、お光がにこやかに入ってきた。

「おはよう」

手拭いで顔を拭^{ぬぐ}う。水が冷たくて、体が引き締まる。

「小吉が玄関でお待ちしています」

お光が言う。

「おお、そうか。ありがとう。すぐに着替えるから」

部屋の時計の針は、午前六時を指している。

「お弁当とお茶を用意しておりますので、それを持って行ってくださいませ」

お光は、早速、貞剛の布団を片付けている。

「かたじけない」

よく気がつく娘だと仕事ぶりに感心をしながら、ズボンとシャツに着替える。

玄関には、茶が入っているのだろう竹筒と、竹皮に包まれた握り飯が三個ほど置かれている。

「おじさん、おはようございます」

瞳を輝かせた少年が立っている。日焼けして、見るからに活気がある。

「君が小吉君か。幾つだね」

貞剛は、握り飯を風呂敷に包み、竹筒と一緒に腰からぶら下げた。

「十二歳だよ。おじさん」

返事に気持ちよいほど勢いがある。

「こら、小吉、おじさんじゃない。支配人様と言いなさい」

困惑した顔でお光が叱る。

「よいよい、おじさんでよい。おじさんに違いないからな」

貞剛は声に出して笑った。

「みろよ、姉ちゃん、おじさんでいいってさ」

小吉は小鼻を膨らませて生意気そうに言った。

「ちゃんとお山にご案内するんだよ。お握りは持ったかい？ 水筒

は？」

「ちゃんと、ほら」

小吉が、腰に巻いた風呂敷と、竹筒をお光に見せる。

「では小吉君、行きましようか」

「行ってきます」

小吉は弾むような足取りで貞剛の先を歩いた。

住居を出てみると、遙か、二千メートル近い赤石山あかいしやまや下兜山しもかぶとやまなどの四国山脈が壁のように目の前に迫っている。道はすべて登り坂でうねうねと続いている。

「おじさん、汽車に乗らないの？」

小吉が聞いてくる。

去年、明治二十六年、新居浜惣開と銅山の途中の端出場間はでば、約一〇・三キロの下部鉄道かぶ、そして石ヶ山丈と角石原間約五・五キロの上部鉄道かみが完成し、運行を開始していた。宰平、念願の事業の一つだった。

「今日は、昔の人のように歩いて登ろうと思うんだ」

「仲持さんみたいだね」

「鉄道ができるまでは、仲持さんが銅山から鉱石を港まで運び、港からは生活物資を山に運んでいたんだね」

小吉は横に並んで歩く。貞剛の脚力を気遣っているのか、歩みはゆっくりだ。

「おばあちゃんが仲持をしていたんだよ。大変だったって」

仲持をする人は、牛車や鉄道の開通で明治二十四年にはいなくなつたという。

「そうなのか。それは大変ご苦労様だったね」

貞剛は、小吉を労わる。

「おじさん、お山の偉い人なんだろう？ 姉ちゃんが言っていたよ」
小吉が、貞剛を見上げた。

「さあな、偉い人かどうかは知らないなあ。私が決めることではな
いから」

貞剛は穏やかに笑う。

「いつか汽車に乗せてよ」

小吉は真剣な顔だ。

「ああ、分かった。乗せてあげるよ」

「ホント？」小吉の顔が晴れやかになる。「約束だよ」

「約束する」

貞剛は笑みを浮かべながら、きつぱりと言う。

貞剛は、小吉の笑顔を見ていて、心が晴れやかになっていくのを感じていた。別子に来て以来、こんな明るい表情に触れたことがない。久保や幹部たちのじめじめと湿った顔ばかりだ。彼らの表情が明るくなる時が来るのだろうか。

朝早く、徒歩で銅山に向かったと知ったら、久保たちは、どんな顔をするだろうか。それを思うと少し笑いが込み上げてくる。

歩き続ける。周囲には田が広がっている。緑の稲の葉が風に揺れている。

気になることがある。空に薄く霽もやがかかっているのだ。良い天気

なのになんかどういわけだろうか。それに少し硫黄いおうのような臭いがする。振り向いてみると、惣開精錬所の高い煙突が目に入る。操業開始時間にはまだ早いと思われるが、すでに火を入れているのか、煙が薄く立ち昇っている。それが風向きの具合でここにまで流れてきているのだ。途端に貞剛の表情が曇った。

「おじさん、煙を吸っちゃだめだよ。毒だつて言うから」

小吉が注意を促す。小吉は慣れているのか、口を手で押さえるようなことはしていない。

「ありがとう」

貞剛は感謝の言葉を言いつつも、やはり手で口を押さえるようなことはしない。

煙害だ……。その原因を作っている住友の人間としてこの煙を、手で口を塞ふさいで凌しのぐようなことをするわけにはいかない。

「小吉、どこへ行くんだあ」

道の左右に広がる田の草取りをしていた老婆が声をかける。

「お山の偉い人を、お山に案内しているんだ」

小吉が答える。

「精が出ますな」

貞剛は軽く会釈えしやくして声をかける。

老婆は曲がった腰を伸ばし、険しい表情で貞剛を睨んだ。

「あんたが新しい支配人様かね」

すでに村人には、支配人交代の情報が広まっているようだ。

「伊庭と申します」

貞剛は、わずかに警戒心を抱きつつ、答えた。老婆の怒りを感じたからだ。

「これを見せてくれ」

老婆が周辺の稲の葉を鎌でざくりと刈った。それを貞剛に差し出す。

遠目には緑に見えていたが、老婆が持った稲の葉には、黒褐色の斑点が多くついている。

「わしらはここで長い間、米を作っている。あんたらが銅を掘りなさるずっと以前からじゃ。ここらは水がきれいでな。米がたんとできた。ところがじゃ。あれが」老婆は惣開精錬所の煙突を指さし、「あれができて、煙を吐くようになってからはこのざまじゃ。米がまともにできん。このままではわしらは飢え死にせんといかんのです。なんとかしてください」とますます険しい形相になった。

貞剛は、老婆から稲の葉を受け取った。葉はどこどころが枯れてしまい瀕死ひんしの様相だ。老婆の悲痛な叫びが、稲の嘆きとして貞剛の胸に迫る。自分が育った琵琶湖周辺びわこの青々とした稲を思い出す。それに比べると、なんと悲惨なことか。胸の中で悲しみが渦巻き、

貞剛の涙腺が不覚にも緩みそうになる。

この辺りの土地は住友が買い上げている。住友は、煙害の苦情を防ぐための緩衝地帯を作ろうと、大幅に田畑を買い占めている。いわば口封じだ。老婆は住友の小作のはずだ。

——なんと姑息こそくなことをするのか。

貞剛は、煙突からたなびく煙を見つめた。怒りを覚える。老婆を小作にすることで、住友に文句を言わず従えというのか。

銅と米、麦。人が生きるためにどちらが大切か。幼い子供でも米、麦と答えるだろう。

銅は米、麦を買う金を稼ぐことができるが、命を養うことはできない。私たちが銅山で働く者たちは、この老婆が作る米や麦を食べて生きている。

また、たとえ土地を買い占めたとしても老婆は米や麦を作らねば生きていけない。それが天から与えられた役割だ。

住友は、老婆が天から与えられた役割を無慈悲にも奪っているのだ。

「何とかしてくださいな」

老婆がさがるように言い、顔の皺しわを一層、深くした。

貞剛は、大きく頷き、その稲の葉を受け取ると、弁当を包んでいた風呂敷の中に入れた。

——仏に逢えば仏を殺し、祖師に逢えば祖師を殺し、羅漢に逢えば羅漢を殺し、父母に逢ったら父母を殺し、親類縁者に逢えば親類縁者を殺し……。

昨夜、遅くまで読みふけた臨濟録の言葉が蘇ってきた。

「住友を殺さねばならない……」

貞剛は、齒ぎしりをし、再び煙突を見つめた。

〈つづく〉